



One Day All This Shall Come to Nothing

いつか、すべて消えてなくなる

平成19年度文化庁芸術拠点形成事業 AI・HALL 自主企画 日英現代戯曲交流プロジェクトドラマ・リーディング

2008年2月16日(土) 19:00開演 / 17日(日) 14:00開演

会場 アイホール 兵庫県伊丹市伊丹2-4-1 <http://www6.ocn.ne.jp/~aihall/>

AI・HALL



いつか、すべて消えてなくなる

One Day All This Will Come To Nothing by Catherine Grosvenor

AI・HALL 自主企画 日英現代戯曲交流プロジェクト ドラマ・リーディング

日 時 2008年 2月 16日 [土] 19:00 開演 / 17日 [日] 14:00 開演

受付開始は開演の40分前、開場は20分前

* 16日 [土] 終演後、演出家と劇作家らによるポスト・パフォーマンス・トークを開催します。

会 場 アイホール 兵庫県伊丹市伊丹2-4-1 <http://www6.ocn.ne.jp/~aihall/>

料 金 1,000円 (全席自由席)

前売・問い合わせ 072-782-2000 (アイホール) aihall@juno.ocn.ne.jp

助 成 財団法人地域創造 平成19年度地域芸術文化国際交流推進事業

作 キャサリン・グロヴナー

翻 訳 谷岡健彦

演 出 田辺 剛 (下鴨車窓)

出 演 樋口美友喜 (劇団アグリーダックリング)

岡村宏懇 (劇団 M.O.P.)

丸山英彦 (デス電所)

宮川国剛 (トイガーデン)

条あけみ (あみゅーず・とらいあんぐる)

平岡秀幸

※E/M/P/er キャサリン・グロヴナー (Catherine Grosvenor) = 劇作家

キャサリン・メンデルソン (Katherine Mendelsohn) = トラヴァース・シアター文芸マネージャー

照明・舞台監督 西崎浩造 (エスエフシー)

音 響 濱田留美 (エスエフシー)

宣伝美術 清水俊洋

制 作 山口英樹 (アイホール)・中山弘美 (エアリアル・ヴォイス)

主 催 伊丹市 / (財) 伊丹市文化振興財団

提 携 トラヴァース・シアター supported by the Scottish Arts Council



企画製作 アイホール

平成19年度文化庁芸術拠点形成事業



日英現代戯曲交流プロジェクト

英国スコットランドの首都エディンバラの中心的劇場であるトラヴァース・シアターとアイホールの提携事業「日英現代戯曲交流プロジェクト」は、両国劇作家作品のドラマ・リーディングを契機として、将来的には本格的上演を目指す継続的なプロジェクトです。

※これまでのドラマ・リーディング

- 04年 『雌鷲の中のナイフ』 作/デイヴィッド・ハロワー 演出/鈴江俊郎
- 05年 『ガガーリン・ウェイ』 作/グレゴリー・パーク 演出/土田英生
- 06年 『アイアン』 作/ロナ・マンロー 演出/岩崎正裕
- 07年 『ステキなアバター』 作/ジュルズ・ホーン 演出/こまのはえ

トラヴァース・シアターリーディング「Japan in Scotland」

- 04年 『月の罅』 作/松田正隆 演出/ニコラ・マッカートニー
『うれしい朝を木の下で』 作/鈴江俊郎 演出/キャサリン・メンデルソン
- 06年 『その鉄塔に男たちはいるという』 作/土田英生 演出/ロース・キャンベル
『ここからは遠い国』 作/岩崎正裕 演出/ジョン・ミッチェル

トラヴァース・シアター Traverse Theatre



世界に名だたる演劇祭=エディンバラ・フェスティバルの中心的な会場として位置づけられており、1963年開場以来、新作上演数は600本をゆうに越え、スコットランドを代表する数多くの劇作家を輩出してきた。また、スコットランドをはじめ世界中の劇作家に新作を委嘱し、その演目は批評家や観客から高い評価を得るとともにさまざまな演劇賞を獲得し、ロンドン・ウェストエンドでの上演や国内外のツアーに発展している。

現在、日本では毎年10万件もの検索願が出されていると言う。そのうち無事に保護されるのは半数程度とのことで、検索願すら出されない事例も少なくないことを考慮に入れば、1年でやはり、およそ10万人前後が行方不明になっていると推定されるらしい。ざっと120人に1人の割合だ。

いっしょに暮らしていた人が、ある日突然いなくなる。その人の安否を気遣いながら、いつとも知れぬ帰りをひたすら待ち続ける——これは大切な人と死別するのに劣らず、つらい経験であるにちがいない。いや、生きているとも死んでいるともわからない宙ぶらりんの状態がずっと続くぶん、いっそう苦しいことかもしれない。一方、姿を消した側の人たちは、どんな思いで日々を過ごしているのだろうか。

1978年生まれ的女性劇作家キャサリン・グロヴナーの処女作『いつか、すべて消えてなくなる』は、このような問いをめぐって書かれている。この印象的なタイトルに彼女が込めたのは、いまの苦しみもいつかは消えてなくなるはずだという希望なのだろうか。それとも、日々の暮らしの中のささやかな幸せも詮じはやがて消え去ってしまうものにすぎないという虚無感だろうか。その最終的な判断は、舞台をのぞいた観客のみなさんに委ねることにしたい。

谷岡健彦



Photo: Pascal Souz

キャサリン・グロヴナー (Catherine Grosvenor)

1978年エディンバラ生まれ。ケンブリッジ大学でドイツ語とポーランド語を専攻。トラヴァース・シアターのヤング・ライターズ・グループに参加し、05年にトラヴァース・シアターで上演された『いつか、すべて消えてなくなる』でデビュー。07年にはグラスゴーのトリオン・シアターの「Sure Shots」シリーズで短編『Lucky Lady』が初演された。現在、トラヴァース・シアターから新作の委嘱を受けるとともに、同劇場製作のスコットランド在住のポーランド移民の体験を描くドキュメンタリー演劇『Cherry Blossom』(08年秋初演予定)の創作チームに参加している。



たなべ つよし
田辺 剛

劇作家・演出家。1975年生まれ。福岡県出身。京都大学在学中に演劇を始める。2004年から作品ごとにメンバーを募るユニット「下鴨車窓」を中心に創作活動を行う。2005年、『その赤い点は血だ』で第11回劇作家協会新人戯曲賞受賞。2006年、文化庁新進芸術家海外留学制度の研修員として韓国・ソウルに一年間留学。2007年、『旅行者』で第14回 OMS 戯曲賞佳作受賞。

